

『第3回国公私3大学環境フォーラム 社会環境シンポジウム』報告書



2016年12月20日

福岡工業大学社会環境学部教授 鄭雨宗

目 次

1. 実施概要
1.1 開催日時・場所、参加者
1.2 趣旨
2. 実施内容
2.1 基調講演
2.2 パネルディスカッション
2.3 ポスターセッション
3. フォーラムを終えて
3.1 成果
3.2 課題
4. 今後の3大学連携に向けて

1. 実施概要

1.1 開催日時・場所、参加者

1) 開催日時：2016年12月16日（金）13:00～19:00

2) 開催場所：福岡工業大学 FIT ホール

3階大ホール(基調講演、パネルディスカッション、13:00～16:10)

2階セミナー室(ポスターセッション、16:10～17:50)

レストランオアシス B棟1階(意見交換会、18:00～19:00)

3) 参加者及び関係者：参加者合計 215名

・基調講演者：東京大学大学院新領域創成科学研究所

社会文化環境学専攻 准教授 福永 真弓氏

・パネリスト：長崎大学 環境科学部 教授 保坂 稔

熊本県立大学 環境共生学部 准教授 柴田 祐

福岡工業大学 社会環境学部 教授 森山 聡之

・ポスター発表：長崎大学（12件、14名）、熊本県立大学（14件、16名）、

福岡工業大学（17件、19名）

・3大学関係者：長崎大学5名、熊本県立大学3名、福岡工業大学8名

・学生：社会環境学部116名（2年33名、3年46名、4年37名）

・地域一般参加者：7名

・実行委員会：6名

・運営スタッフ：17名

1.2 趣旨

- ・テーマ：環境教育・研究、連携の在り方

- ・フォーラムの趣旨：長崎大学環境科学部、熊本県立大学環境共生学部、福岡工業大学社会環境学部は、平成26年12月に3大学連携協定を締結し、その締結記念事業として「環境共生フォーラム」を熊本県立大学で開催した。また昨年度は長崎大学に会場を移し、環境教育・研究の連携のひろがりテーマに第2回環境フォーラム「環境科学シンポジウム」を開催した。協定締結から3年目を迎える今年度は、福岡工業大学を会場に「社会環境シンポジウム」を開催した。ここでは3大学の環境教育・研究活動の特徴を活かした効果的な協働研究の可能性を模索するとともに、社会科学の視点から“地域との連携”を重視した環境調和（配慮）型社会の形成について、実質的な取組みを考える機会にすることを目標とした。

2. 実施内容

2.1 基調講演

- ・演題：「地域環境史から百年の計を考える：絵解き地図という手法」

- ・内容：環境社会学の観点から地域の歴史を考えていく際に、土地が持つ意味とその地域の人々の相互関係性をどのように伝えるかを考えさせる内容であった。特に概念的な社会学と環境との関連性を丁寧に説明しつつ、東日本震災の災害地を回りながら得た貴重なフィールドワークデータを分かりやすく地図上で表す手法は参加者にとって斬新なものであった。また空間利用の「まるごと」考えるという発想は、複合的かつ総合的な価値観を連想させ、それを達成するためにいかに現代社会の不確実性やリスクをコントロールするかにもつながり、その答えは他学問（経済学）においても重要な関心事である。今回の福永真弓氏の講演は環境学がもつ複合的要素を地域という主観的要素で考察する良い機会であった。

2.2 パネルディスカッション

- ・テーマ：地域社会にとって大学の役割とは？

- ・テーマの趣旨：近年、地方再生や地域創生という言葉が様々な場面で使われるようになり、政府の資料はもちろん大学の学部においても地域創生学部が出来るほどまでになった。まさに社会環境学部が出来た頃の日本社会における環境ブームを連想させるような気もする。そもそも大学は一般大衆と距離を置き、教会や聖堂とともに山の奥にこもっていた。ただ社会と一定の壁を作り、物理的な距離は置くものの、常に社会の将来にとって何が必要なのかといったその方向性を示す役目を果たしてきた。そこから数百年経った今はどうなのか？アクセスの良さや施設の充実さを売りに社会への使命感を果たしているように見える

が、果たしてそうなのだろうか。極めて主観的ではあるが、今の大学は社会に変化を求めるより、社会の変化に如何に大学が対応するかに大きく比重を置いているように見える。そこで、今回のパネルディスカッションでは社会と大学との関係性について大学に身を置く立場として果たして何ができるのか？そもそも大学に求められる役割は何なのかを考えうる契機にしようとした。

まず、長崎大学の保坂稔先生（環境社会学）はドイツでの自然エネルギーについて自然エネルギー村などを中心に多くの人とのインタビューから大学での学びと社会との関係性について日本に示唆する点を紹介した。

次に、熊本県立大学の柴田祐先生（地域計画）は熊本地震による建物の被害状況を調査しながら今後どのような防災計画が必要なのかについて実態調査結果を紹介した。特に復興カルテにより今後の街再生や防災計画に役立つとともにこのような調査活動に学生が積極的に参加することが次の世代へとつながることが大いに期待された。

最後に、福岡工業大学の森山聡之先生（流域環境学）は福岡市の浸水被害の原因と対策のための防災マップ作成や雨水タンクの活用について説明があった。また自宅の防災ハウスや大学の乙女が池のスマート化など多岐にわたる研究と実践的な提言を行った。

2.3 ポスターセッション

・ポスター発表では、43 件に 59 名の発表者が参加し、積極的な発表と熱心に耳を傾ける光景がみられた。今回は 3 大学のポスター発表をより盛大にするため、最初から 3 大学を混ぜた形でポスターを設置し発表を行った。その結果、他大学間でのポスター発表者とも積極的な議論が出来た。また多くの学生参加者による発表もあり、学生同士での議論なども多く見られた。

3. フォーラムを終えて

3.1 成果

・環境フォーラムのテーマを「3 大学連携の在り方」にし、原点に戻ってもう一度大学連携の在り方を考えるきっかけになった。

・基調講演者は出来るだけ実質的な議論が出来る若手に選定したことで、フォーラム全体に渡ってより実効的かつ有益な議論が出来た。

・ポスターセッションでは学生や留学生の参加もあり、英語によるポスター発表もはじめて行った。それにより参加した他の学生への良い刺激につながった。

・実行委員会の先生、大学、アルバイト学生、特に大学・地域連携推進室の事務方の献身

的なサポートがあり今までより盛大かつ成功的な開催が可能となった。

3.2 課題

- ・年1回のイベント的な開催では、3大学連携の深度ある進展に限界がみられる。
- ・教員主導の今のような形式は普段の業務と重なり大変負担となり、他大学も同様な傾向がみられる。今回は3月から約10か月間の準備期間を要して開催した。
- ・参加者確保のため平日の授業を振り替えて行うことでの環境フォーラム開催の純粋な意義が問われる。

4. 今後の3大学連携に向けて

- ・学生主導型の連携への転換：現在は教員主導型で基調講演やパネルディスカッション中心の開催形式であるが、パネルディスカッションでも学生が参加するような形式や学生ポスターセッションの拡大などが検討される。出来れば企画段階から学生参加が望まれる。
- ・インターゼミの開催：3大学の学部ゼミでのインターゼミを前期、後期1回ずつ開催することで普段から学生同士の交流を深める。それにより、より多く他大学の研究や活動に関心や興味をもつ機会が生まれる。
- ・3大学連携の合同研究発表会：現在は自分の大学やゼミ内での研究発表に留まっているが、インターゼミの開催、夏合同合宿やフィールドワーク、合同研究発表会などを企画、開催することで、3大学の学生同士での共同研究発表を目指す。
- ・高校、地域住民参加の促進：今すぐ出来るとは思えないが、将来的には大学での研究をより多くの地域社会に広めるためにも、地域住民や高校生が参加するような形式の共同研究発表もあって良いと思われる。

以上